

第四次聖杯戦争にセイバーが召喚されました。

主(ぬし)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

切嗣とアイリスフィールはセイバーを召喚した。セイバーはアーサー王で、少女だった。ここまでは正史通り。だけど、なんとそのセイバーはFate／Zero、Fate／staynight、Fate／hollow ataraxiaの歴史を一巡してやって来た、未来のセイバーだった。しかも、なんだかけっこう突き抜けた性格に変わっていた。そんなお話です。

目次

第一話	(2015年)		1
第二話	(2023年)		13
第三話	(2031年)		31
第四話	(2039年)		35

第一話（2015年）

この日、ドイツの山奥にそびえ立つアインツベルン本城にて、衛宮切嗣とアイリス・フィール・フォン・アインツベルンはサーヴァント・セイバーの召喚の儀を執り行った。神代の鞘を触媒にして召喚されるのは、名高き騎士の王、アーサー・ペンドラゴンである。柱のような眩耀を屹立させる魔法陣を前にして、マスターである衛宮切嗣は無視できない不安に表情を固くしていた。彼の王の誉れ高い逸話が示すように、アーサー王は正義と理想を体現する聖王と言ひ伝えられている。目的のためには手段を選ばない冷酷無比な切嗣との相性はきつと最悪に違いない。強力であるが故に扱いづらいサーヴァントの運用方針について、切嗣は大いに頭を悩ませていた。彼が眉間に皺を寄せる間にも魔力の輝きは生物のように渦をまき、やがて形を持ち始める。超高密度の魔力がヒト型に凝縮し、仮初めの生命いのちが吹きこまれていく。

「……………!!」

切嗣とアイリス・フィールが思わず息を呑むなか、重厚な甲冑をかち鳴らし、魔素で編まれた肉体を獲得した2本の足が然しつかと大理石を踏みしめる。蒼天のように鮮やかな外マント套と重層な戦装束が力強く風にはためき、磨き上げられた鎧が刃の如く純銀に煌め

く。炎のように燃え立つ黄金の髪はまるで咆哮する雄獅子の鬣だ。たてがみ

奇跡と呼ぶべき光景を前にしてアイリスフィールが全身を身震いさせ、次の瞬間、「えっ!」と声を高く裏返らせた。召喚されたアーサー王が、予想よりもずっと小さく、華奢な——少女の姿をしていたからだ。魔法陣の淡い残り灯に照らされる様子は、月下の一夜花のような繊細な儚さすらある。すうつと細く開いた双眸に見据えられ、切嗣はさらに混乱した。

だが、次に少女が放った第一声によって、切嗣の混乱メーターはマックスを振りきつた。

「んむあ~~~~~た貴方ですか、キリツグ」

眉根に梅干しのようなシワを作ってもイヤそうにノタマツた少女は、二三度辺りを見回して「そういうことですか」と一人勝手に納得すると、ポカンと口を開ける切嗣とアイリスフィールの間をズカズカと大腿で通り過ぎた。そのまま勝手知つたるなんとやらとばかりに城内をずんずんと突き進んで食堂に顔を出し、その場にいた料理番のホ

ムンクルスメイドをむんずと捕まえる。たつぷり5分ほどのフリーズを経て大急ぎでその後を追った二人が少女を見つけた頃には、彼女はそれまでの見事な拵えの甲冑を脱ぎ捨てて私服姿でテーブルに広げられた出来立ての料理に舌鼓を打っていた。白いブラウスと紺色のスカートという現代風の衣服は、シンプルだが少女の姿によく似合っている。が、アーサー王のイメージとは少しもまったくこれっぽっちも相容れなかった。

「……えーつと、確認なんだけども、貴女はサーヴァントで、セイバーで、アーサー王、なのよね？」

「もぐもぐ如何にも私がサーヴァントセイバーであり、ブリテンの王、アルトリア・ペンドラゴンですよむしろむしろや久しいですね、アイリスフィールごっくん」

本人がそう言っているのだからおそらくそうなのだろうが、メイドが運んできた日本料理を見るやいなや「おお、この天麩羅は鯉ですね！珍しい！」と喜色を浮かべてひよひよいと口に放り込んでいく様子には果てしない違和感がある。しかも二本の箸を器用に使っている。アーサー王伝説には何時から『ブリテン王は和食好き』という尾ひれがくつついたのか。

「うむむ、白粉おしろいのような薄力粉によつて油衣が新雪のようにきめ細かく美しい。ほお、油に新鮮なオリーブオイルを足しているんですね。出来立ての湯気に混じつてふわつと漂うワインにも似たオリーブの芳醇な香り、サクサクと歯ざわりの良い食感、しつかり

熱の通ったホクホクの魚の白身、歯を通した瞬間にジュワツと染み出してくる魚の肉汁にはほんのりとレモンと塩の風味を感じられる。天つゆに漬けなくてもご飯が進みます——おお、ジャポニカ米！ しかも炊きたて！ 実によくわかつています！ ここのメイドはセラに匹敵するこだわりを持ってしていると見えます。良い腕前です。褒美としてランスロットの領地を半分授けてもいいくらいです」

などと滑らかに品評してみせる口ぶりはやけに玄人じみていて、明らかに現代の——しかも豊かな食文化を経験して舌を肥やしている風だった。アーサー王の時代といえば中世の初期も初期。およそ『豊か』という言葉とは無縁の食生活を送っていたはずだ。薄力粉もオリーブオイルも、ましてや天ぶらやら天つゆなんてシロモノも当然存在するはずがない。いや、そもそもにして、どうしてこのサーヴァントはすでに切嗣とアイリスフィールの名前を知っているのか。

「まさか奇妙奇天烈なハズレを引いたのでは」と表情を震わせ始めた切嗣にチラと意識を流した少女は、やれやれと大きなため息をつく。最後のサーモン寿司を口に放り込んでのそりと面倒くさそうに立ち上がる。

「もぐもぐゴックン。けふつ。さて、キリツグ。貴方のことは好きではありませんが、仕方がないので一から説明してあげましょう」

「お前とは初対面だ。嫌われる心当りがない」

「大有りです！ 私が貴方に何度煮え湯を飲まされたことか！ 私に対する不当な扱いの数々は思い出すたびに腹が立ってきます。とは言え、そのおかげで今の私があることも事実ですし、今となつては過ぎたことです。まあ、貴方方にとってはこれからの話となるのでしようが」

ますます訳が分からなかつた。訝しげに見下ろす切嗣を真つ直ぐに見返し、頭頂部から生えた髪をピヨコンと揺らした少女が胸に手を当ててにつこりと笑う。そして、荒唐無稽な自己紹介を口にした。

「私はアルトリア・ペンドラゴン。そしてサーヴァントセイバー。しかもただのセイバーではありません。第四次聖杯戦争にて貴方が召喚し、聖杯をイヤイヤながらふつ飛ばし、第五次聖杯戦争にて貴方の息子に召喚されて聖杯を嬉々としてふつ飛ばし、さらに繰り返される4日間を打開するために主を背に守つて敵の群れを吹っ飛ばすなど、それはそれは輝かしい経験を積んだ、パ〜〜フェクトなセイバーですっ！」

ふんす、と鼻孔を大きく開いて名乗りを終えた少女に、二人は硬直した表情を返すしか無かつた。しかし、世迷い言と断じることが出来ない。この説明でなら、少女——セイバーがどうして切嗣たちの名を知り、城の構造を熟知し、箸で寿司を摘み、当代慣れして飄々と振舞っているのかも筋が通る。とは言え、各所の話は切嗣にとつては受け入れ難いものであり、彼は合点がいくどころかささらに不可解のループに陥る。

ていうかコイツ聖杯ふっ飛ばしてばっかりだな。

「……ありえない」

「私には再び貴方に召喚されたことの方がそう思えますけどね。召喚に応じるつもりもなかったのですが。まあ、どうしてこのような奇妙なことになったのかは私にもわかりませんが、シロウには言葉では語れないたくさんの義理がある。その恩返し的一端と考えれば貴方に全面的に協力するのも吝かではありません。ええ、仕方なく」

「なんでそんなに上から目線なんだ」と額に青筋を浮かべて肩を持ち上げる切嗣をまあまあと論し、アイリスフィールが話題を逸らす意図もこめて問いかける。

「ねえ、セイバー。その、シロウって誰のこと？」

「切嗣の息子ですよ、アイリスフィール。養子だそうです」

「えっ？ 養子？ い、イリヤは？」

「日本のアインツベルン城でメイドたちと優雅に暮らしています。バーサーカーのマスターとなつて、灰色筋肉ダルマの肩で年がら年中ふんぞり返っています。弟にあたるはずのシロウと危うい関係を持つと拉致監禁催眠誘拐など画策したり、かと思えば本気で殺そうとしたり、筋肉ダルマをモチーフにした趣味の悪い戦車に乗って城の中を暴れまわつて最終的にアインツベルン城が崩壊したりとかなりヤンチャな娘です」

「えっ？ えっ？ 待つて全然意味わかんない。そんなの私のイリヤじゃない」

「残念ながら現実です。今のうちに教育を見直したほうがよいかと」

「——ふらっ」

「あ、アイリっ!!」

脳の処理限界を超えて立ちくらみを起こしたアイリスファイルの肩を慌てて支え、切嗣はパンク寸前の思考を必死に手繰り寄せながらなんとか言葉を紡ぐ。

「せ、セイバー。お前の言い分を信じるのなら……お前にとって、現代に英霊として召喚されての戦闘はこれで四度目、聖杯戦争もすでに二度経験し、しかもこの第四次聖杯戦争はお前にとっての過去にとくに経験済みということになる」

「如何にも。この第四次聖杯戦争に参戦する全ての陣営について、分かりうることを全てを諳んじています。マスターからサーヴァントの真名、特徴、宝具、弱点、さらには戦争の行く末まで、なんでもござれ。サーヴァントには強敵が一人いますが、当時の私ならいざ知らず、今の我らであれば十分に倒せるでしょう。肩にヤカンをくつつけたゴードボツチになんぞ負けてやれません」

この時ばかりは自らを“私”ではなく“我ら”と複数形で語ったセイバーの誇らしげな口ぶりに多少の違和感を感じれど、すぐに掻き消えた。まるで、店自慢の特盛りカレーを前にして“このくらいなら制限時間内に食べ終われるかな”とでも言うようなおおよそ緊張や虚言とはかけ離れたさっぱりとした物言いに、切嗣は頭を蹴飛ばされる衝

撃を受けたからだ。衛宮 切嗣が今まで捨て去ってきた幸せや心身を灼いた悲しみを全て掛けても到底掴めるはずのない僥倖中の僥倖を、彼はよりによって今この瞬間という最高のタイミングで引き寄せることに成功したのだ。

この英霊は間違いなく規格外だ。否、次元外だ。かの有名なアーサー王を、彼——いや、彼女か——に最も適した剣士のクラスで召喚できただけです。アドバンテージを得ているのに、よりによって歴史を一周先回りしているとは。誰も知らない情報と彼女を知っているし、そのうえ、一周前よりも強くなっていると言う。まさに卑怯反則そのものだ。これだけのジョーカーを手にしては、もはや負けるほうが難しい。汗が伝う頬に刃のような鋭い笑みが走る。

必勝の図式を脳裏に描きながら武者震いに背中をわななかせさせる切嗣を気にする様子もなく、セイバーはテーブルのバケットに山積みになされたドイツプレットを人差し指で品定めしつつごちる。

「それに、あの金ピカサーヴァントのマスターはリンの父親ですから、どうせどこかで大ポカをやらかすでしょう。お、この干しブドウのパンは美味しそうですね。……やけに手触りが硬いのが気になりますか」

「リン？」

「遠坂凛。遠坂時臣の娘です。血筋のためについてうっかり大失敗を起こすことはあれ

ど、世界に通用する当代屈指の魔術士です。わかりやすいツンデレ娘で、シロウのことを好いています。ちなみに、リンの実妹の間桐桜もシロウを好いています。間桐桜のサーヴァントもシロウに気があるようです。不服ながら皆、シロウと肉体関係を持ったこともあります。むぐぐ、か、硬い！そして味が無い！これだからドイツのパンは質素すぎて困る！ブリテン王国のパン職人だってもうちよつとマシなものを………いえ、なんでもありません。美味しい。ドイツ最高。ブリテンは滅べ！

眉をハの字に寄せてもしゃもしゃと不満気にパンを咀嚼しながら自分が興した王国を貶している。とんでもない王である。だが、そんなことよりも気になることを彼女は口にしていた。肉体関係を持ったのは「皆」と確かに口にした。その一瞬、セイバーは口元を乙女のように小さく綻ばせていた。

「……まさか、セイバー、お前も、」

「ご明察の通り、私もシロウを好いていますし、肉体関係もたくさん持ちました。そりやあもう、畳の上でとか、お布団でとか、お風呂でとか、野外でとか、凜と三人でとか」ほんのりと頬を朱に染めるセイバー——見た目言えば15、6歳ほどの少女——の姿に、切嗣は額に手を当てて天を仰いだ。未だ見ぬ好色息子に思いを馳せ、その将来を激しく憂いた。遠坂の娘のみならずその妹にも手を出してその上サーヴァントも食い散らかすとは、いくらなんでも見境なさすぎだし性欲旺盛すぎるだろう。いったい

どこの誰が育てたんだ。顔が見てみたい。

「ああ、そうそう。今の聖杯は使い物にならな……いえ、なんでもありません。今は伝えないほうがいいでしょう」

はたと何かを思い出したらしいセイバーだったが、意味ありげに独り納得するとさつさとメイドが運んできたケーキに勢い良く顔を突っ込んでモクモクと頬袋を膨らませ始めた。それは物語を根幹から揺るがす真実であったのだが、「イリヤの教育をリセットしなきゃ」と呟いてバツト片手に走りだした己の妻を追いかける切嗣が気づくことはなかった。

「さあ——ランズロット我が盟友よ。やり直しを、始めよう」

今度のセイバーは、一味違う。

第二話（2023年）

ぱつかくくくん。

深夜、空気の冷え澄んだ港湾区画にアホのごとく間の抜けた金属音が甲高く響き渡った。次いで、ガツチャンと大柄の鎧武者が派手に尻餅をついたような重い音が低く響く。

事実そうであつた。

「……………!?!? ……!?!?」

尻餅をついたまま、鎧武者——漆黒の騎士が、自身に何が起こつたのかわからず呆然と左右に首を回す。酩酊したように視野がクラクラとして定まらないのは直前に喰らつた脳天への一撃のせいだろう。気づけば目^ま底^ひに限定されていた視界が広がつており、兜の喪失をぼんやりと悟らせたが、狂^{バー}化^{サー}した彼にはそれ以上思考を巡らせることは不可能だつた。

不意に、目の前に何者かが颯爽と現れた。「隙」や「間合い」といった領域の先にある超越的な歩みで、煌びやかな存在が彼の前に鮮やかに屹立する。忘我のまま見上げれ

ば、晴天のような戦装束と磨きぬかれた鎧の少女騎士。右手に伝説の聖剣エクスカリバーを携えた彼女こそ、金髪の麗しい騎士王に——彼の主君に他ならない。その泰然とした姿にこそ、彼の狂気いかりは無性に掻き立てられる。

「……Arrrrrthurr……!!」

ビキビキと音を立てて紫色の血管がこめかみに筋を走らせる。自分でも的はずれな怒りだとわかっていた。しかし、それを振り返り自制する理性は失われている。制御不能の感情が胸の内で猛り狂い、穴という穴から怨念となつて吹き荒れ、大地のコンクリートにミシミシと爪が食い込む。憤怒が顔面に夜叉の如く滲み出るその刹那、

「待たせたな。迎えに来たぞ、我が盟友サー・ランズロット」

まるで、道に迷っていた友人を苦笑しながら迎えに来たような——
そんな、理屈拔きの親愛を湛えた微笑みを前に、狂気は跡形もなく霧散した。

数秒前。

冬木市海浜公園、港湾区画にて。

今宵の星は、夜空ではなく地上で輝いていた。その御劍みつるぎから赫奕と放たれる無尽蔵の星の輝きに比すれば、遠い星雲などごとく掠れてしまう。

騎士の栄光。騎士の誉れ。騎士の象徴。あまねく騎士たちの頂点に立つ王が今まさに力強く掲げるその宝劍こそ、世に名高き世界最強エクスカリバの聖劍に他ならない。

「A r r r ——— t h u r r ——— ……!!」

だからこそ、漆黒の騎士は憎む。聖劍を掲げる王その人ではなく、聖劍により始まった運命そのものを憎む。失ってしまった栄光を悔やみ、傷つけてしまった人々を悔やみ、そして絶対の忠節を誓った主君への裏切りを悔やむ。

せめて主君が怒りに身を燃やして彼を手に掛けてくれれば、まだ救いがあった。敬愛する主君の正当な怒りによって己の行為を断罪されて逝けるのなら、臣下としての救いがあった。しかし、理想の王たる主君は彼以上に悩み苦しんでしまった。儚い矮軀を震わせながら、どうにかして己の妻と忠臣を護ろうと呻吟に悶え苦しんだ。拳句の果てに、彼の裏切りによって崩壊を始めた王国のために身命を賭し、最後の戦場ラッで短すぎる生涯を閉じた。事切れるその時まで不忠の騎士を責めることなく、理想の体現者は志半ばにして永久の眠りについた。殺めたばかりの息子の遺骸を前に、血に染まる丘で無念を噛みしめて非業の最期を遂げた。

まだ年若かった。寿命の半分も使い尽くしてはいなかったろうに。祖国のために身を捧げた健気で儂い少女だったのに。王国はまだ聖王を必要としていたのに。あらゆる騎士たちの献身も、忠誠も、奉公も、全てを台無しにしてしまった。今までの努力も犠牲も、何もかも全てが水泡に帰した。彼の裏切りのせいだ。

違う。違う、違う、違う!! 違う!!!

こんなはずではなかった。こんなことを望んでなどいなかった。皆、最善だと思ったことを必死にやっただけだ。誰も彼も、恋した女を、在るべき秩序を、騎士の矜持を、主君への忠誠を、ただただ命がけで果たそうと全てを投げ打っただけだ。その結末が最悪のモノと至ったのなら、それは——それは、運命そのものが間違っていたからに違いない。

そうして、彼は運命を呪う狂戦士パーサーカーとなった。運命の起点となった聖剣を憎み、それを抜き放った主君の運命を憎んだ。

嗚呼、我が王よ。儂くて偉大なブリテンの勇者よ。どうしてそんな剣モウを手にとってしまったのですか。どんなに陰惨な時代でもいい。どんなに乱れた国でもいい。あんな皮肉で悲惨な終焉を迎えることに比べれば、我らの邂逅に何の意味があったのか。

騎士になどならなければよかった。王になど為なつて下さらねばよかった。貴方とも、彼らとも、彼女とも、最初から出会わなければよかった。我らが伝説の始まりを無かつ

たことに出来れば、どれほど救われることだろう。

——ああ、そうだ。ソレを、そのキラビヤカな剣を叩き折ればどうだ。そうして忌々しい伝説を微塵に碎いてやれば、運命の出発点もまた消えてくれるのではないか。そうだ。そうすれば、きつと、俺の裏切りも、彼女グイネウイアの涙も、主君も忠臣も王国も、全てが最初から無かったことに出来るのだ。きつと皆が救われるに違いない。望むに違いない。喜んでくれるに違いない。ああ、ならば——為さぬわけにはいかない。

もはや有るか無しかもわからぬ思考の中、彼が狙い定めたのは他ならぬ彼セイバーの主君だった。否、主君の姿をした「運命」だった。今の彼にとって、運命を覆す試みだけがたつたひとつの贖罪の術であり救済の道だった。

呪われた運命よ、いざ刮目するがいい。呪われた騎士の狂気いかりを目に焼き付けて砕け散れ——!!

兜の目庇の下、血走った眼光がギロリとセイバーを凝視する。次の瞬間、鉄靴ソルレットがアスファルトを激しく踏み砕き、乱舞する狂槍が目にも留まらぬ速さとなつて大気を切り刻む。剣閃は視認可能領域を超えてストロボのような瞬きへ加速する。彼は狂戦士と成り果てても尚衰えぬ精確な体捌きで地を踏みしめ、凄まじい勢いで間合いを詰めていく。それは最強騎士の神業に狂化ステータスの膂力増強が相乗された結果であつた。如何なる達人ですら防御も回避も叶わない爆発的な剣撃の嵐がセイバーに迫る。

「逃げてツ、セイバー!! いくら貴女でもこれは……!!」

カマイタチすら発生させる恐るべき攻撃に、気を動転させたアイリスフィールが身を乗り出して訴える。だが、セイバーは動かない。煌々と輝く剣を片腕のみで振り上げたまま、襲い来る風圧など意にも介さずピクリとも動じない。

セイバー自身が身を以て知っているはずだ。生前、剣術の技量においては最強騎士の名を欲しいままにしたランスロットに及ばなかったことを。

「セイバー、何を……!?!」

「あ奴、死ぬ気か——?」

「む——?」

ランサー、ライダー、そしてアーチャーまでもがセイバーの真意を凶りあぐねて瞠目する。誰がどう見ても絶体絶命の状況だ。漆黒の凶刃はすでに彼女の眼前だ。直ちに宝具を開放するなりしなければ切り抜けられない窮地に違いない。

だというのに、彼女は何故、微笑みを浮かべているのか？

困惑するそれぞれの反応を置き去りに、宝具化した鉄塊が大きく弧を描いて振りかぶられる。狙い澄ましたるはヒト型全ての急所、すなわち脳を擁する頭蓋だ。王冠に飾ら

いふんと鈍いではないか」

その場にいるセイバー以外の全員がポカンと口を開けて呆けた。辛勝などではない。圧勝という言葉も当てはまるまい。まさに鎧袖一触、袖を払うが如くの勝利。まるで赤子の手をひねるように、セイバーはバーサーカーの全身全霊の一撃をあつけらかんと返り討ちにしたのだ。それこそ、ダメーヅが兜のみで収まるように手心まで加えて。

「……（んん）とが……」

圧倒的なまでの実力差がなければ起き得ない結果に、アイルランドの英雄にして世界第一級の武芸の実力者であるランサー、デイルムッド・オディナの肉体内で心臓が胸郭に体当たりをした。腹の底から震えが走り、滝のような汗が吹きでる。目の前の少女が、伝承のアーサー王よりも遥かに強いことを理解したからだ。言い伝えよりずっと過酷な強敵たちを打ち倒し、壮絶な修羅場をくぐり抜ける経験を積み重ねた猛者であると理解したからだ。その手に握る一対の魔槍がやけに頼りなく感じて、デイルムッドは歯噛みした。己が全力で相対しても、今のセイバーに勝てる想像がまったく描けなかった。

「ははあ、さては大方、私の嫁を寝取ったあと坊主になってフランスなんぞに隠居したせいで、すっかり修練を怠っていたのであろう？ 似合わんことなぞせずにはさつさと還俗すればよかつたものを。そんな体たらくでは、キャメロットで卿との手合わせを今か今か

と待つているギャラハッドやガウエインを失望させてしまふぞ」

なんとも軽々とした口ぶりだった。先ほどの斬り合いは吟遊詩人が世代を超えて高らかに謳い伝えるほどの世紀の死闘だったはずなのに、それを乗り越えたとは思えない、ヘリウム満タンの風船のようにフワフワと気の抜けた物言いだった。そして、そこには一切の皮肉も誹謗を含まれていない。互いに勝手知つたる真の友と心得ているが故に心の深い部分にまで踏み込めるに違いなかつた。

「湖の騎士」 って……」

「ランスロットのこと、だよな……?」

目を丸くしたアイリスフィールとウエイバーが口中に独語する。その名は欧州圏では知らぬ者のいない名だった。ランスロット・デュ・デュラック。フランス出身の美男子にして、キヤメロットの円卓の一角を担った騎士。古今東西において右に出る者はいない一騎当千の劍兵つわものにして、主君の王妃を篡奪した不義の騎士……。

彼らはセイバーが口にした二つ名とエピソードからバーサーカーの真名を推理して驚いたが、それがアーサー王の死のキツカケを作った裏切りの騎士の名だと知るに至つてさらに驚愕した。しかしそれ以上に、自らと王国の滅亡の原因を作つた不忠者にこうも親しげに話してみせるセイバーの度量の大きさに、驚愕を通り越して呆れを覚えた。

「……………」

真名で呼ばれたバーサーカーは、しかし応えない。応えられない。乾坤一擲の技をま
んまと防がれ、返す刀でしたたかな一撃を——しかも峰打ちを喰らった故の惨めな敗
北感からではない。どんな顔をして面おもてを上げればいいのか、わからなかったからだ。兜
を失つて曝け出された自分自身の醜い顔を主君に見られたくなかつたからだ。かつて
の美貌は見る影もない。灰色にくすんで狂気に歪んだ愚か者の顔貌など、情けなくて見
せられなかつた。

永遠の忠誠を誓つたのに不貞を働いて裏切つた者の憐れな末路、それが自分だ。こう
も容易く、ものの見事に敗北を喫してしまつては、もはや格好が付く付かないどころの
話ではない。いったいどのような顔で向き合えばいいのか。

狂化していても尚忘れることの出来ない悔恨に魂までも苛まれ、黒の騎士は地に沈み
込むように力を失つて、

「許す」

その言葉に、いとも簡単に救い上げられた。

意外な——自分には絶対に与えられることはない諦めて、だけでも心のどこかで
喉から手が出るほど欲していたその言葉に、黒い騎士は弾かれたようにハツと顔を上げ

た。

そこにあつたのは、生前にだつて見たことのない、実に爽やかで純粋な微笑みだった。まるで父のように、母のように、兄のように、姉のように、成功も失敗も幸福も後悔も何もかもを無条件に受け入れて包み込んでくれる、かつて自分が崇拜し、この方になら」と心身を預けた主君の微笑みが燦々と彼を照らしてくれていた。

「全てを許す。卿の不貞も、裏切りも、仲間殺しも、何もかも」

嘘偽りない口調と表情で、セイバーは尚も微笑み続ける。到底宥められるはずのない重罪を口にしながら、あたかも子どもがしでかした瑣末な悪戯を笑い飛ばすように、軽い足取りで黒い騎士に向けて歩む。騎士が呻き、見開かれた目が激しく問う。「なぜ」と。

「もはや誰も怒つてはいないからだ。皆、卿を許している。ガヘリスとガレスも、お前に斬られたことを恨んでいないと言っている。許さんと言ったバカ息子は、まあ、許すように私がちよつとアレな感じでえいやつと説得した」

「アレな感じで、つてどうせまた剣でぶつ叩いてモガモガ」

眉を顰めるウェイバーの口をアイリスファイールが慌てて塞いだ。

そんな一幕などまったく目に入っていないランスロットは、しかし沈み込む一方だった。彼は高潔であるがゆえに愚かな自分自身を許すことが出来なかった。

だが、私は殺してしまつたのです。あらゆる人たちが深く深く傷つけてしまつたのですよ。台無しにしてしまつたのですよ。私を慕ってくれていた騎士たちを、戦場を共にした仲間たちを、やっと立ち直りかけていた民たちを。

「ならば、また皆でやり直そう」

それでも、私は、私は——貴方を——。

「ええい、もう！うじうじとしつこい！シャキツとしないか！シャキツと！」

ぱっか〜ん。

「……………ツツツツ?!」

またもや間の抜けた音が響いた。今度は兜無しでの一撃だったため、峰打ちとはいえずすがのバーサーカーも頭頂部を両手で抑えたままゴロゴロと地面を転がって悶絶する羽目になつた。激痛を想像したライダーが片手で口を覆って「うわあ」と引き攣る。

「ふむ、^{ショウワ}昭和の家電は叩けば直る」と士郎が言っていました。やはり円卓の騎士にも通じるみたいですね」

空恐ろしいことを呟きながらエクスカリバーを素振りの要領でぶんぶん振るって、やれやれと形のいい鼻からため息をはふんと落とす。ちなみに、昭和の家電は技術が未

発達だったこともあり、コンデンサやケーブルといった部品のサイズが大きくなつて付加が甘かったために接触不良が起きやすかつたことが原因で叩くと接触が良くなつたのであつて、間違つても今の家電とサーヴアントを斜め45度から叩いてはいけない。

「真面目で堅物というのは必ずしも美德ではないぞ。他ならぬ私が言うのだからな」

洗い流したように美しい紺碧の戦装束を颯爽とはためかせ、バーサーカーの前に仁王立つ。そして片眉を優しげに上げて、再びたおやかに微笑む。

「私が許す。卿自身の赦しなど関係ない。私が、卿の罪を、許す。他ならぬ卿の主あるしが。それ以外の誰の許可がいるというのだ？」

有無を言わせない、まさしく王の口ぶり。しかし、そこに傲慢さはなく、ただただ度量の深さが垣間見えるのみだった。人間の姿をしているのにナイアガラの滝を見下ろしているような気持ちにさせる、王の中の王のそれだった。

「……アナタ、ハ……」

錆の浮いた声が喉から絞り出された。そのことにウェイバーがポカンと口を開けて驚愕する。本来ならバーサーカーとなつたサーヴアントは会話など出来ない。それを犠牲にしての狂化ブーストだからだ。そんな不可侵のルールすらも呆気なく覆させてしまうほどの「絆」が二人のあいだに甦つた証拠だった。

バーサーカーは——否、ランスロットはセイバーを呆然と見上げた。生前は、そこそ人を寄せ付けないという点においては月に住むのも同然のような人だった。自らを「王」という装置として固く規定し、清廉潔白を自他共に厳しく課していた。感情を挟む余地を赦さずに拘子定規な対処を行ったことにより離れていった人心は数知れない。それが彼女の美德でもあり欠点でもあった。言い換えれば、それがアーサー王という人物の生まれ持った性分で、変えることのできない魂の在り様だった。できない、はずだった。

「……あなたさま、は、ついに……」

だが、これはどうしたことか。一体全体、何が彼女をこうもポジティブに変えたのだろうか。どんな経験を経て、魂の在り様すらも変えることができたのだろうか。

今の彼女には以前の張り詰めた危うさは欠片も見えない。清濁併せ呑み、適度に法を重視し、適度にグレイゾーンを見極めて悪巧みもする。適度に脱力し、適度に意識を張る。空回りすることなく要領よく思考を巡らせ、自らの実力を隅から隅まで把握した上で「あととなるようになる」とどっしりと構えている。そして、事実どんな理不尽が襲いかかってきても片手でどうにかしてしまいそうな頼り甲斐のある雰囲気をつぶりと纏っている。何が起きてても余裕をもって事態を收拾してしまいそうな全能感を備えている。まるで曙光を身のうちに宿したような王^{オーラ}気を煌煌と放つさまは、思わず目を眇

めるほどの眩い感動を覚えさせた。

その瞬間、ランスロットは完全なる正気を取り戻した。

「ついに到達されたのですね、真の騎士王の器に」

突如として流暢な物言いとなったバーサーカーに驚き、ギルガメツシュすらも思わず瞠目した。全能を自負する英雄王の彼を以てしても、バーサーカーを狂化から解き放つなどという大それた奇跡は起こせないからだ。

光を呑み込む闇の色に淀んでいた鎧が、磨き上げた黒真珠の如きなめらかな煌めきを放つ。その腰にはエクスカリバーと対を為す人類の秘宝アロンダイト。かつてキヤメロットにこの騎士ありと称賛を浴びた「湖の騎士」の全盛期の姿がそこにあった。

狂気の淀みを颯爽と振り払って居ずまいを正したランスロットに、セイバーは歯をすつかりと見せて、にんまりと笑ってみせた。

「どうだ、少しは人の心がわかるようになったらろう?」

またもやランスロットは即答できなかつた。顔を向けられなかつた。今度は、頬を流れ落ちる感涙を見られたくなかつたからだ。王は人の心がわからないなどと言ったのはどこの糸目野郎だろう。開けても閉じてもその目は節穴だ。そんなもの文字通り寝言だつたに違いない。何故なら、この御方はこんなにも巨きな懐おほの持ち主へと到れる器を秘めていたのだ。

「苦勞ばかりかけたな、ランスロット卿。もう大丈夫だ」

熱い男泣きに肩と唇を震わせながら、ランスロットは頭を激しく左右に振るって否定した。今までの苦勞がすべて報われた想いだった。主君が自らの命を懸けるに等しく、またそれ以上の掛け値なしの大人物であったと識ることが出来る……なんと幸福なことだろう。まさに騎士冥利に尽きる。今ほどこの聖王に仕える騎士であることを誇りに思ったことは無かった。

「一旦、『座』に還るがよい。そこにキャメロットの騎士たちが待っている。皆、お前との再会を待ち遠しく思っている。モードレッドの奴めがしつこく言ってきたら、次はもう一本のツノを折る」と伝えるがいい」

しかと王の命を聞き入れたランスロットの肉体が光の粒子となって空中に溶けていく。驚くべきことに、それはサーヴァント自ら聖杯戦争から離脱を選択した故の現象だった。サーヴァントとは、未練を残した英霊が聖杯にその解消を頼んで現世に生じた泡沫のような存在だ。即ち、ランスロットはもう、この世に一切の未練などなくなつたのだ。彼はもう、欲しかった赦しもを手に入れられたのだ。

「我らが王城にてお待ち申し上げます、我が王」

「うむ。すぐに呼ぶことになる。存分に鍛え直しておくがいい」

「御意に」。短い言葉と僅かな螢火だけを跡に、ランスロットは現世との繋がりを自ら

手放し、己がいるべき場所へと還つた。港湾区画に静けさが舞い戻る。誰も彼も言葉を忘れたように呆気にとられていた。ただただ、目の前の騎士王の底知れないカリスマに慄いていた。黄金のサーヴァントを含めて。

「そう———すぐに喚ぶことになる」

そう言つて自らを振り仰いだセイバーの好戦的かつ挑戦的な視線を、ギルガメツシユはもう雑種の戯れ言とは切り捨てられなかつた。彼の固有能力『千里眼』ですら、もはやセイバーが引き起こす未来の波紋を見通せなかつたからだ。即ち、セイバーが『千里眼』を拒絶する能力を保有しているか、もしくは彼は決して認めようとしないが———『千里眼』が通じない格上の相手である可能性があるという疑念がギルガメツシユの脳裏に横たわつていた。

セイバーの笑みが勝利を確信して鋭さを増す。彼女は、ギルガメツシユのエヌマ・エリシユ^{きふ}を知っている。そして、それを打ち破る手段を持つている。そんな予感がヒシヒシと背筋を刺した。第六感が警報を放つという久方ぶりの感覚をギルガメツシユはすこぶる不快に覚えた。

「……………ふん」

セイバーの勝ち気な視線を憎々しげに、しかし逃げることなく真つ向から受け止めて、ギルガメツシユは密かに心に決めた。

この女は——否、この騎士王は油断ならない。

だが、結論を言つてしまえば、結局、油断をしなくてもギルガメツシユはセイバーには及ばなかつた。何故なら、今度のセイバーの切り札は、エクスカリバーやカリバーンではないからだ。そんな物モノではない。騎士王の真の宝とは、騎士王が剣よりも信頼するモノたちとは——

第三話（2031年）

空間がはち切れようとしていた。

「私の宝具について、どんな予想をした？英雄王ギルガメツシュ」

セイバーの声音は、星の玉座から語りかけるような神々しい威厳に満ち溢れていた。その問いかけに、彼女と相對するギルガメツシュは応えない。

「まさか、〃円卓の騎士たち全員を召喚する〃——たったそれだけなどと軽んじてくれているのではあるまいな？」

やはりギルガメツシュは応えなかった。より正しく言えば、応えられる余裕がなかった。悲鳴じみた叫びが漏れ出ないように、顎に全精力を注がなければならなかったからだ。

「おのれ……！」

固く閉じた上下の歯の間から唸るような苦しげな声が漏れる。キツく皺の寄った眉

間を幾筋もの汗が伝い落ち、高い鼻梁の先からポタポタと地面に落ちていく。まるで恐怖を必死に抑えつける子どものような、一見すると情けないその姿。しかし、これはギルガメツシュが現時点で実行できる精一杯の虚勢であり、彼の強大なプライドが為せる唯一無二の奇跡であった。彼は、少しでも気を抜けばたちどころに自らの喉からこの言葉が迸ることがわかつていた——「デタラメだ」と。

事情を知らぬ者たちは、ギルガメツシュの不自然な反応を見て「彼らしくない」と眉を顰めるだろう。神の血を引く英雄の中の英雄にして傲岸不遜な絶対者には似つかわしくない態度だと疑念を抱くだろう。だが、第四次聖杯戦争最終夜にして最終決戦たるこの日この瞬間、彼が対峙することになった相手は、あまりにも度を越し過ぎていた。

3次元空間が定員オーバーではち切れようとしていた。雲が散り散りになり、磁場がうねり、大気が帯電し、乱流する風が吹きすさぶ。いつ何時、空間が張り裂けて四次元空間との狭間が口を開けるかわからないほどだった。世界を構成する電子の内側で量子力学エネルギーが飽和し、上限値をぶち抜いて、ついに空間内に許容しきれなかった魔素が他次元へ逃げようと藻掻く。それらはバチバチとそこらかしこで紫電の大輪を咲かせ、この光景に壮絶な華を添える。この事象は、すなわち己の体内の存在許容限界点を遠慮なしに踏み超えた宇宙的エネルギー量に現3次元空間が苦しみ悶える結果であった。

そしてそれは、現在進行系で加速度的に増大していた。
また二騎召喚された。

「遠からん者は音にも聞け！近くば寄つて目にも見よ！我が名はフランスシャルルマーニュが十二勇士——」

「我こそはアイルランドフィオナ騎士団が一番槍——」

次々と参集していく彼らを目にしたギルガメツシュの口元で、わなわなと震える唇が
ついに決壊する。

「デタラメだ!!!」

全サーヴァントにおいても十分にデタラメな性能のギルガメツシュをしてそう言わしめた相手——パーフェクト・セイバーが、声を震わせる彼を悠然と見下してふつと微笑を浮かべた。浮かべて、背後の赤みがかつた髪少年をイタズラっぽく振り返る。

「だ、そうですねよ、士郎」

「なんだかスカツとするな、セイバー」

彼女が誇る宝具の全容は、ギルガメツシュすら比肩し得るものでもなく、誰も彼もの想像を超えているものだった。

即ち、パーフェクト・セイバーの最強宝具『騎士王の御下へ』とは――

第四話（2039年）

時は遡る。

「アナルは名詞じゃなくて形容詞——!!!」

フリーライターとして言葉の正しい使い方に一家言あつたのだろう。限界まで開けた顎から虹色の光の奔流を吐き出しながら、バーサーカーのマスター、間桐雁夜は雄叫びを虚空へと向けて流れ星の如く解き放つた。

キラキラとした星屑が天空へ飛び散り、夜空へ吸い込まれる。と同時に、痩せた肉体からふつと力が抜けてドシャツと大地に突つ伏す。天に向けてぐつと高く差し出された彼のケツには、まるで選定の時を待つ聖剣のように綺羅びやかな剣の鞘が突き立っている。否、しかして実際にそれはカリバーンの鞘、『アヴァロン』であつた。

「よし、これでバーサーカーのマスターの救済は完了です」

雁夜のケツからスシユポンツツと卒業証書を入れたあの筒のような音を立ててアヴァロンを抜き取り、パーフェクト・セイバーが背後の少女をにっこりと振り返る。な

にが「よし」なのか。

「あわわ……あわわわわ……」

そこでは、少女——間桐桜が尻餅をついて腰を抜かしていた。突然間桐邸の正面玄関をぶち破ったと思ったら親戚の雁夜叔父さんのケツに鞘を突き刺した凶悪無比なサーヴァントに大きな恐怖を覚えたのだ。無理もないよ。

「はじめましてですね、桜。心配いりませんよ。彼のように、このアヴァロンの癒やしの力ですぐに魔蟲の害毒を浄化してあげますからね……」

窓から差し込む月明かりを鞘の光沢が鋭く跳ね、反射した光がセイバーの笑顔を怪しく照らしあげる。会ったこともないのに妙に馴れ馴れしい態度だ。その背後では雁夜のケツがビクツビクツと浜辺に打ち上げられた魚のように痙攣している。常軌を逸した景色だし、どこからどう聞いても頭のおかしい凶悪犯の台詞と表情だ。もともと度胸のない桜には効果てきめんだった。

「い、いや——！せめて、せめてお尻の処女だけは」

「問答無用」

「あへえ——！！?？」

セイバーの踏み込みから逃げられるはずもなく、ズムンとめり込む無遠慮な衝撃を臀部に感じたと同時に桜もまた星屑の煌めきを口から放出し、白目を剥いて気絶した。彼

女が自らの肉体から一切の呪いが消えたと気がつくのは、ケツに包帯を巻いた雁夜によつて起こされてからであつた。

『^ア全て遠き理想郷』は、あらゆる傷を癒し、あらゆる呪いを撥ね退けることが出来る超常の宝具だ。神話級の効力の前には、たかだか500年生きたくらいのお魔術師がコトコトじつくり煮詰めた呪い程度、ケツからの高圧洗浄でスツキリ爽やかである。

桜のケツから鞆をスポンと引き抜き、「さて」とセイバーが部屋の隅の暗がりになんか視線を投げる。

「次は貴様の番だぞ、マキリ・ゾオルケン。神妙に尻を出せ」

「……貴様、何が目的だ」

間桐家の当主、間桐臓硯が暗闇から滲み出るように姿を現した。その表情は、自らの本名をズバリと言ひ当てられたことで憎々しげに、かつ心から悔しげに歪んでいる。完璧に姿を隠していた自負があつた。闇と同一化した彼は、並どころか高位の魔術師にすら見つかからない自信があつた。それだけに、彼を台所に飛んできたちよつと大きめの羽虫の如くひよいと見つけてみせたセイバーの底知れなさに恐怖した。バーサーカーとの戦闘は、偵察用の魔蟲を通じて一部始終を見ていた。故に、目の前の少女の形をしたサーヴァントが天井知らずの戦闘力を秘めていることは理解していた。「このサーヴァントと戦つても勝てない」と第六感で確信し、臓硯は不本意の極みでありながらも姿を

晒して時間を稼ぐという唯一の選択肢をとることにしたのだった。

いつ何時、斬り掛かれてもいいように、自身の仮初の肉体に瞬発の準備を促す。肉
体側が「無駄だ」とヒステリックに叫ぶにかかわらず、逃走を強いる。失ったはずの汗
腺が冷や汗を垂れ流し、和装の背をじつとりと濡らした。しかし、ここで死ぬわけには
いかない。不老不死という目的のため、断じて死ぬわけにはいかないのだ。

「くくく、アーサー王よ。聖杯に何を求めるにせよ、貴様の願いは届かんよ。なぜなら、
聖杯は汚染されているからだ」

喉を鳴らし、おぞましい笑みを刻む。彼はセイバーの動揺を誘おうと試みた。その隙
を狙って逃亡を図ろうと画策したのだ。そしてその試みは、

「知っている」

「……………は？」

もの見事に見抜かれて失敗した。

「アヴェンジャーのクラス、真名をアンリマユ。第三次ぜんかいの聖杯戦争で変則召喚された
サーヴァント。奴のせいで聖杯が汚染されていることはよく知っている。本人に
会ったこともある。まあ、悪い奴ではなかったぞ」

「は……………は？何を言っている？なぜそのことを、貴様が……………」

驚愕による意識の空白。動揺を誘われたのはむしろ自分だった。一瞬にして最悪の

空白を生じさせたことに臓硯が愕然と後悔したのも束の間、たしかに視界に捉えていたはずのセイバーの姿がストロボのようにかき消えた。尻を突き出して倒れ伏す雁夜と桜を見て「背後だ！」という当然の帰結に行き着くも、ランスロットをして足元にも及ばなかつたセイバーの瞬発速度に追従できるわけもなかつた。

ズヌン！と腰から背筋に向かつて重い衝撃が走った。脳髓まで衝き上げられるような電撃的ショックにつま先がピンと伸びる。身体に鉄柱を埋め込まれてその場にガツチリ固定されたような感覚にビクリと硬直した臓硯の耳元で、セイバーが囁く。

「理想を追い求めるがあまり、理想に振り回され、雁字搦めになって身を滅ぼす。どこかで聞いた話だな。まったく耳が痛い」

その声に敵意はなく、代わりにあるのは儂い同情心だった。

「き、貴様、何の話を、というか何故執拗にケツばかり狙つて、」

「数百年という延命の過程で、肉体を魔蟲に置き換えたことの苦痛によつて魂が摩耗していき、理想を抱く志も、なぜそれを抱いていたのかという記憶さえも消え失せた。実に健気で悲しい男だな、マキリ・ゾオルケン」

「な——」

臓硯は絶句する。それは、もはや臓硯自身すら忘れてしまつていた彼の人生の背景だった。500年前にロシアで生を受けた彼の本名はマキリ・ゾオルケン。若かりし頃

は、人に降りかかる悪しき理不尽を憂い、嫌悪し、撥ね除けるために魔術師の道を歩み、聖杯にその願いを託そうとした正しき魔術師だった。そのために激痛を伴う延命を重ね、肉は削ぎ落とされ、蟲の集合体かたまりとなつていった。それは摩耗以外の何物でもなく、生きながらに腐敗していく地獄でしかなかった。その果てに何時しか目的と手段が入れ代わり、崇高な理想は失われ、高潔な魂は劣化し、延命のみのために延命を繰り返すバケモノと化してしまった。

誰も知るはずのない本質を真正面から——正確には真後ケろから——突きつけられ、臓硯の自我はショックで飽和する。

「儂は——私は——」

「成仏するがいい、古き正義の求道者よ。悪鬼に堕ちた貴様の魂にも一抹の救いがあることを祈る」

そして、光。内側から浄化されていく光。長らく忘れていた陽光の温もりが下半身から上半身へ瞬時に染み渡った。神経を蝕む痛みが春風に吹かれた如く取り払われれば、万力のようなだった激痛に挟まれて軋みを上げていた本来の臓硯の意識が放散し、淀みと澱が攪拌され、再構成される。これこそアヴァロンによる完全浄化の為せる秘技だった。廃人寸前だった雁夜と桜を健全な人間へと回帰させた奇跡だった。だが、血肉を全て悪しき魔蟲に置換している臓硯にとって、“聖なる浄化”とはそのまま“消滅”を意

味する。だからこそ、臓硯は闇底へのスパイラルに墜ちる他なかった。

(いや——もういい)

臓硯は静かに眼を瞑る。彼は自身の消滅をなんの躊躇もなく受け入れた。不死は叶うはずのない身に余る願望であり、この消滅は遠回しにしていた運命だったと理解した。むしろ赦されざる暴挙を重ねた己に、この温かい浄化は望外な幸福であると悟ったのだ。

ついに臓硯の肉体を構成していた魔蟲全てが素粒子レベルにまで分解され、天に向かつて天の川の如くおだやかに揺らめきながら伸びていく。肉体のくびきから解き放たれた意識が茫漠として広がり、世界へと還っていく。

—— まったく、しようのない人ですね、マキリ——

—— ユステイーツァ！私は君に——

果たしてそのような再会が叶ったかはわからない。わからないが、星空を見上げて柔和に微笑むパーフェクト・セイバーの様子を見るに、おそらく臓硯は最期の最期に会い

たかった者と会えたのだろう。ここまでで何回ケツやら尻やらといった単語が出たとやら。

「……終わったのか、セイバー」

満足気な様子のパーフェクト・セイバーの後方からダークスーツに身を包む長身の男が歩み出る。彼女のマスターである衛宮切嗣だ。

「ええ、間桐についてもこれで解決です。残すところはアーチャーのみとなりましたね」
「キヤスターとアサシンに続いて、ランサー、ライダー、そしてバーサーカー。5つの勢力をこうも簡単に打ち破ることが出来るとは……」

喜びを通り越して困惑の表情を浮かべる。無理もない。パーフェクト・セイバーの快勝っぷりは間近にいた切嗣にすら信じられないものだった。

まず、凶悪殺人鬼コンビだったキヤスターとそのマスターは被害を増やす前に早々にズバツと袈裟斬りにし、アサシン勢力は衛宮切嗣との華麗な共闘で撃破（神父は再起不能になるまでタコ殴り）。その後、意を決して決闘を挑んできたランサーを正々堂々と打ち破り、そのマスターは適度に痛めつけたあとロンドン行き飛行機のエコノミッククラスに詰め込んだ（婚約者はプライベートジェットで帰った）。そして、征服王アレキサンダーたるライダーとの決戦においては――

「エクスカリバーとカリバーン、まさかあれほどの威力とは思わなかった」

壮絶な光景を思い出した切嗣が感嘆とも呆れとも判別できない溜め息を漏らす。

本来、サーヴァントとして召喚されるアーサー王の宝具は攻撃聖剣『約束された勝利の剣』のみだ。しかし、パーフェクト・セイバーはもう一振り、生前に失ったはずの選定聖剣『勝利すべき黄金の剣』をも保持していた。全盛期を遥かに超える莫大な魔力、それを注ぎ込まれたエクスカリバーと同性能を有するカリバーン。この対城宝具2連撃は、通常のエクスカリバー開放時の威力の単純な2倍に収まらない。ライダーの宝具『アイオニオン・ヘタイロイ』もド派手極まりないものだったが、もはや重量級熱核兵器数発分に匹敵するTNT換算60万トン分の破壊光線を前にしてはどんな大軍も塵芥まっしぐらだった。

「これが星々の息吹か。世界の果てより珍しいものを見られたな」

ライダーはそう呟いて掻き消え、残されたマスターの少年は丁重にロンドン行き飛行機のエコノミークラスに放り込んだ。飛行機内でなぜかもう一人の乗客とすったもんだのひと悶着があつたらしいが、知ったことではない。責任は乗せるまでの精神は大事なのだ。

「疑っているわけじゃなかったが、本当にお前は歴史を一巡しているんだな。さすがだ、セイバー」

「パーフェクト・セイバー」

「さすがだ、パーフェクト・セイバー」

条件反射の如く律儀に言い直した切嗣に、セイバーは満足そうに

「パーフェクト・セイバー」

パーフェクト・セイバーは満足そうに頷いた。切嗣は小さな、しかし不快ではない溜め息を吐いて苦笑いを浮かべた。と、何かに引つ掛かつてはたと表情を一変させる。

「そういえば、さつき聖杯が汚染されていると言っていたが……」

「ああ、そうそう。言い忘れていました。聖杯はとても良くないサーヴァントのせいですっかり濁ってしまい、優勝者の願望をひねくれて実現しようとする役立たずになりました。〃この世のすべての悪〃なんて二つ名の真つ黒な反英霊を召喚するからです。私の知る歴史では貴方が勝利した挙げ句にとんでもないことになりましたね。いや懐かしい」

「……は？」

とんだ爆弾発言である。

「ど、どこのバカがそんなバカなことを」

「貴方の依頼人で、貴方の岳父です」

ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルン。アインツベルンの当主にして切嗣の妻であるアイリスフィールの製造主である。第三次聖杯戦争で禁じ手のアヴェン

ジャー召喚を行った挙げ句に開幕ダッシュで敗退したうえ聖杯を台無しにしたのはこの老翁だ。だいたいコイツのせい。

それを聞いた切嗣は傍らにあつた間桐邸の電話に飛び付くと、他人の口座引き落としであることをいいことに躊躇なく国際電話を掛け、アインツベルン本城のアハト翁を呼び出してクドクドと苦情を叩きつけ始めた。

そんな彼の背中にクスリとした笑みを咲かせたあと、パーフェクト・セイバーは最後の戦いに思いを馳せる。そして、あの不敵な台詞を口にした。

「さあ——行くぞ、英雄王。武器の貯蔵は十分か？」